歴史地理学 175 1～21 1995.9

近世後期における江戸行楽地の地域的特色

——『江戸名所図会』からみた行動文化——

金 子 晃 之

I．序
(1) 研究目的と方法
(2) 資料とその性格
II．『江戸名所図会』の行楽地の諸類型
III．江戸行楽地の地域的特色
(1) 江戸の行楽地域
(2) 行楽地の分布の特色
IV．結 語

I．序

(1) 研究目的と方法

近世都市江戸に関する研究は，多様な関心のもとに行われてきた。歴史学の分野では，1970年代に入り本格的に江戸研究の体系が整備され[1]，1980年代には江戸に関する総合的研究である「江戸学」が提唱され現在に至っている。この江戸研究において，研究者の共通認識として重視されてきたのは都市住民論であり，江戸住民の生活実態を解明する研究が蓄積されてきた。一方，江戸の都市空間に関する研究は，主として歴史地理学や建築史学の分野で行われている。都市における人間の行動は，政治的・経済的あるいは文化的であるかにかかわらず，都市空間で行われるから，都市空間全体ないしその部分空間の諸特徴や変化の究明は，都市の特徴を明らかにするために必要不可欠であり[2]，その意味で都市空間論は江戸住民論と密接に関わっている。

従来の都市空間研究において，江戸の地域構造に関するものとしては，江戸の都市構造を都市建設の面から解明した内藤昌 (1966) [3]，江戸の多心的都市構造を論じた松本豊寿 (1967) [4]，住民意識という点から江戸の地域分析を行った竹内誠 (1983) [5]，地域の住民階層から地域構造を考えた松本四郎 (1983) [6]，江戸の名主役料より江戸の地域構造を明らかにした加藤貴 (1984) [7] などの研究がある。これらの研究は，江戸の地域構造の理解を深め，江戸住民の生活実態を地域構造との関わりにおいて明らかにしてきたといえる。しかし，これらの江戸の地域構造との関わりにおいて，江戸住民の行動について詳細な検討はされていない。したがって地域構造との関連を考慮しながら，江戸住民の行動生活の実態を，都市空間および都市周辺における行動という視点から考えていく必要がある。この視角から論じられたものとしては中川徳治 (1965) [8] の研究があるが，江戸住民の詳細な検討にまでは及んでいない。

以上の研究動向をふまえ，本研究では江戸住民の行動空間の特徴を明らかにし，江戸住民の生活実態を検討することを目的とした。都市住民の行動空間は，住民階層，行動目的および住居地域によって多様である。したがって，江戸住民の空間行動を考察するにあたっては，さまざまなレベルで具体的に分析していく必要がある。しかし，本研究では江戸住民の行楽行動に視点をおいて，江戸の地域的特色を検討していく。

研究方法としては，江戸住民の寺社参詣，物見遊山，縁日，祭礼，花見などの広い生活領域にわたる行動文化[9]に着目し，行動文化の場である名所をとりあげ，名所を行楽地として位置づけた。行動文化を取り上げたのは，それが江戸

時代後期とくに文化文政期以後における江戸住民の行動の特色を示す顕著な文化現象であり，江戸さらには江戸周辺の広大な地域の空間行動を，行動文化の場である名所を通して把握することが可能と考えたからである。資料としては斎藤幸雄・幸孝・幸成による『江戸名所図会』を利用し，特にその中の挿絵656図を分析対象とした(表1参照)[10]。図絵を取り上げたのは，図絵に含まれる情報を利用するためである。図絵656図の分類を行うとともに，その分布図を作成することにより行楽地の地域的特徴を分析し，江戸住民の行動空間の解明を試みた。

(2) 資料とその性格

『江戸名所図会』(刊本，角川文庫，復刻1966)は江戸および江戸周辺の図絵入り名所案内である。編者は神田雉子町の名主であった斎藤幸雄（長秋），幸孝（県麻呂・莞斎），幸成（月岑）の父子三代であり，画は長谷川宗秀（雪旦）による。天保5年（1834）に3巻10冊が，同7年には4巻10冊が刊行され，全7巻20冊に及んだ。記事の内容は，神社・仏閣を中心に名所の現状・沿革を述べていて，すべて実地調査にもとづくものである。雪旦の絵も実地の写生にもとづくもので，その精緻な描写は当時の景観や風俗を知るうえで重要である[11]。

この『江戸名所図会』の系譜は，近世前期にまでさかのぼることができる。水江漣子（1974, 1977）は，17世紀の『江戸名所案内記』を，その記述方式と表現から4種類に分けている。第1類は通常の紀行文の形式。第2類は仮名草子としての物語性をもち，その中に名所記事を含むもの。第3類は物語性をもたない仮名草子の名所記もので，寛文2年（1662）刊の『江戸名所記』はこれに属する。第4類は第3類が出現したあとで成立した，実用性と遊楽性を兼ね備えている延宝5年（1677）刊行の『江戸雀』や貞享4年（1687）刊行の『江戸鹿子』などの名所記である。この第4類は，貞享年間から元禄期に完成し享保ごろまで流行，宝暦・明和ごろから変貌し，安永9年（1780）の『都名所図会』へと推移していく[12]。この『都名所図会』において，名所図会の形式がはじめて確立する。これ以前の名所案内記と比較して，名所図会は事物の来歴などを客観的に記述しており，しかも挿絵はそれまでの補足的なものと異なり，写実的な多数の地理的説明図が含まれている。名所案内としての役割と至便さにおいてすぐれていて，その客観性はより高いといえる。

『江戸名所図会』は，その名所図会の形式を引き継いでいて，「作品形式としては遊楽性と実用性の完成形態」[13]である。以後，『江戸名所図会』を越える内容の名所案内は刊行されていない。『江戸名所図会』に掲載された名所の数の多さと，その広範囲の収録地域を考えるならば，近世後期の江戸住民の行楽行動を把握する上で有効な資料になる。一書の出現はひとつの社会的現実であり，書かれたものは作者をとりまく社会的諸条件によって，その時代に特有の意味をもつ[14]。したがって，『江戸名所図会』から行動文化の空間的特色を考察することは，都市江戸の人々の多様な生活実態の一部を解明することにつながると思われる。ただ，今回は『江戸名所図会』の名所がどのような基準で選択されたかなど，資料そのものに関する分析は行わない[15]。

II.『江戸名所図会の行楽地』の諸類型

『江戸名所図会』には656種の挿絵が掲載されているが，これらの図絵の内容，図絵の視点，図絵の登場人数，図絵枚数についてまとめたものが表1である。図絵内容は，挿絵の中にみられる行楽内容を宗教関係，社会関係，自然関係，歴史関係と大きく4つに分類し，さらに宗教関係は寺社・寺社以外・年中行事とし，社会関係は市街・街道・村落・年中行事・その他と分け，自然関係は自然地形・動植物・年中行事，そして歴史関係は故事・旧跡・古物と分類した。図絵視点は，図絵の描かれた視点を高，中，低と分けたものである。登場人数は一つの図絵中に描かれた人の数を示す。図絵枚数は，一場面が何枚で構成されているかを表すものである。

表1　『江戸名所図会』図絵分析一覧

注1）図絵名の漢字は新字体に改めた。また，図絵名は省略，改変，適宜作成したものがある。
注2）図絵内容は，挿絵に描かれた具体的行楽内容について対応する記号で示した。
　A：宗教関係――a．寺社　b．寺社以外　c．年中行事
　B：社会関係――a．市街　b．街道　c．村落　d．年中行事　e．その他
　C：自然関係――a．自然地形　b．動植物　c．年中行事
　D：歴史関係――a．故事　b．旧跡　c．古物
　（例）図絵の行楽内容が花見の場合――→Cc
注3）図絵視点は，図絵の描かれた視点を高（H），中（M），低（L）と分類したものである。
注4）登場人数は，図絵の中で数えることのできる人の数を示す。Oは101人以上を意味する。
注5）図絵枚数は，一場面が何枚で描かれているかを表す。

図絵番号	図絵名	図絵内容	図絵視点	登場人数	図絵枚数
1	武蔵国号の故事	Da	—	—	2
2	江戸東南の市街より内海を望む図	Ba	H	○	2
3	元旦諸侯登城の図	Ba	L	73	2
4	八見橋	Be	H	○	2
5	日本橋	Ba	H	○	2
6	日本橋魚市	Ba	L	○	2
7	駿河町三井呉服店	Be	L	○	2
8	本町薬種店	Ba	L	41	2
9	大伝馬木綿店	Be	L	56	2
10	祇園会大伝馬町御旅所	Ac	L	62	1
11	小舟町祇園会御旅所	Ac	M	○	2
12	堀留	Ba	H	○	2
13	伊勢町河岸通	Ba	H	○	2
14	十軒店雛市	Ba	L	60	2
15	今川橋	Be	M	91	2
16	主水井	Be	L	5	1
17	下駄新道	Be	L	11	1
18	鎌倉町豊島屋酒店白酒を商う図	Be	L	○	2
19	護持院原	Ba	H	○	2
20	飯田町中坂，九段坂	Bb	H	○	2
21	御茶の水水道橋	Be	L	31	2
22	三崎稲荷社	Aa	L	33	2
23	筋違八ツ小路	Ba	H	○	2
24	藍染川	Ca	L	4	1
25	於玉が池の古事	Da	—	—	2
26	弁慶橋	Be	L	29	1
27	柳原堤	Ca	M	○	2
28	馬喰町馬場	Ba	L	○	2
29	錦絵	Be	L	35	2
30	薬研堀	Ba	H	○	2
31	両国橋	Cc	H	○	2
32	杉森稲荷神社	Aa	M	52	2
33	堺町葺屋町戯場	Ba	H	○	2
34	猿若狂言古図	Da	—	—	2
35	大門通	Be	L	29	2
36	新大橋・三派	Be	L	○	2
37	四日市	Ba	L	○	2
38	三河万歳の図	Bd	L	17	1
39	中橋	Ba	L	○	2
40	南伝馬町祇園会御旅所	Aa	L	○	1
41	鎧之渡	Be	L	44	2
42	山王祭1	Ac	L	83	2
43	山王祭2	Ac	H	○	4
44	永田馬場山王御旅所・茅場町薬師堂	Ac	M	○	2
45	薬師堂縁日	Ac	L	51	2
46	伊雑大神宮	Aa	L	45	2
47	三ツ橋	Be	H	○	2
48	新川酒問屋	Be	M	○	2
49	新川大神宮	Aa	M	28	2
50	永代橋	Be	H	○	2
51	佃島・住吉明神社・湊稲荷社	Ca	H	○	4
52	佃島白魚網	Be	L	15	2
53	寒橋	Be	H	73	2
54	西本願寺	Aa	H	○	3
55	采女が原	Ba	M	○	2
56	木挽町芝居	Ba	H	○	2
57	新橋・汐留橋	Be	H	○	2
58	尾張町	Be	M	○	2
59	金六町しからき茶店	Be	L	32	2
60	三縁山増上寺	Aa	H	○	6
61	増上寺山内芙蓉洲弁天社	Aa	H	○	2
62	飯倉神明宮	Aa	H	○	3
63	飯倉神明宮祭礼	Ac	L	○	2
64	日比谷稲荷社	Aa	L	4	1
65	烏森稲荷社	Aa	M	10	1
66	藪小路	Ba	L	6	1
67	愛宕下・愛宕社総門	Aa	H	○	3
68	愛宕山権現本社図	Aa	H	93	2
69	愛宕山円福寺毘沙門の使修行の図	Ac	L	21	2
70	青松寺	Aa	H	73	2
71	金地院	Aa	H	59	2
72	西久保八幡宮	Aa	H	14	1
73	飯倉熊野権現社	Aa	M	18	1
74	赤羽	Ba	H	○	2
75	赤羽心光院	Aa	H	○	2
76	竹女故事	Da	—	—	2
77	御穂神社・鹿嶋神社	Aa	M	3	1
78	金杉毘沙門堂	Aa	L	○	1
79	小山神明宮	Aa	M	9	1
80	三田春日明神社	Aa	M	5	1
81	三田八幡宮	Aa	H	53	2
82	聖坂・済海寺・功運寺	Aa	H	55	2
83	竹柴寺古事	Da	—	—	2
84	魚藍観音同堂	Aa	M	74	2
85	潮見坂	Bb	L	11	1
86	伊皿子薬師堂	Aa	M	8	1
87	高輪牛町	Ba	L	38	2
88	高輪大木戸	Ba	L	45	2
89	高輪海辺七月二十六夜待	Cc	L	○	2
90	泉岳寺	Aa	H	38	2
91	如来寺	Aa	M	41	2
92	太子堂・稲荷社・庚申堂・常光寺	Aa	H	86	2
93	石神社	Aa	L	4	1
94	高山稲荷社	Aa	M	22	1

図絵番号	図絵名	図絵内容	図絵視点	登場人数	図絵枚数
95	東禅寺	Aa	H	42	2
96	午頭天王社・東海禅寺	Aa	H	○	6
97	少林院林泉・県居大人墓・南郭先生墓	Ab	L	9	1
98	六月六日品川午頭天王御輿洗の図	Ac	L	○	2
99	御殿山看見	Ca	L	86	2
100	磯の清水	Be	L	5	1
101	品川駅	Bb	M	78	2
102	品川汐干	Ca	L	51	2
103	洲崎弁天	Aa	H	32	1
104	貴船明神社	Aa	H	92	2
105	寄木明神社	Aa	M	35	1
106	本光寺・大竜寺・天竜寺・海竜寺	Aa	H	19	2
107	天妙国寺	Aa	H	54	2
108	品川寺	Aa	M	42	2
109	千体荒神堂	Aa	L	○	1
110	海晏寺	Aa	H	○	2
111	海晏寺紅葉見之図	Cc	L	32	2
112	来福寺	Aa	H	○	2
113	西光寺	Aa	H	19	2
114	弘福寺	Aa	H	11	1
115	大井	Ca	L	2	1
116	鈴森八幡宮	Aa	M	36	2
117	鈴森	Ca	M	○	2
118	八景坂・鎧掛松	Bb	M	16	2
119	戸越八幡・行慶寺	Aa	H	○	2
120	本門寺	Aa	H	○	6
121	日蓮上人題目の図	Da	—	—	2
122	千束池・袈裟掛松	Ca	L	11	2
123	中延八幡宮・法蓮寺	Aa	M	16	2
124	万福寺・馬込八幡宮・梶原屋敷	Aa	H	26	2
125	光明寺	Aa	H	11	2
126	新田明神社・真福寺	Aa	H	22	2
127	矢口古事	Da	—	—	2
128	十騎社	Aa	L	6	1
129	古川薬師	Aa	H	24	2
130	浅草海苔	Be	L	25	2
131	麦藁細工	Be	L	17	2
132	大森和中散	Be	L	25	2
133	蒲田里梅園・行方弾正宅跡	Cc	H	57	2
134	八幡塚・八幡宮	Aa	H	25	2
135	六郷渡場	Be	L	65	2
136	羽田弁財天社	Aa	M	23	2
137	河崎万年屋奈良茶飯	Be	L	38	2
138	河崎山王社	Aa	H	8	2
139	大師河原大師堂	Aa	H	○	2
140	末広松	Cb	L	6	1
141	河崎汐浜	Ca	L	16	2
142	石観音堂	Aa	H	8	1
143	河崎新田社・無動寺・亘新左衛門墓	Aa	H	16	2
144	御霊権現社・亘新左衛門塚	Aa	L	3	1
145	姥が森・栗生左衛門塚	Ca	L	2	1
146	河崎　宗三寺・養光寺・佐々木宮	Aa	H	86	2
147	市場観音	Aa	M	20	1
148	末吉不動堂	Aa	H	8	1
149	鶴見橋	Be	M	55	2
150	生麦村しからき茶店	Be	L	32	2
151	成願寺	Aa	H	10	2
152	白旗八幡宮	Aa	H	8	2
153	子生山観音堂	Aa	H	16	2
154	義高入道墓	Ab	L	3	2
155	観福寿寺	Aa	H	9	2
156	浦島古事	Da	—	—	2
157	浦島塚	Ab	L	13	1
158	神奈川総図	Bb	H	○	6
159	神奈川台	Bb	L	71	2
160	北條上杉神奈川闘戦	Da	—	—	2
161	洲崎明神	Aa	M	51	2
162	観音山	Aa	H	29	1
163	慶雲寺	Aa	H	20	2
164	小机城址・雲松院	Aa	H	10	2
165	泉谷寺	Aa	H	14	2
166	師岡熊野権現宮	Aa	M	5	2
167	折本村淡島明神社	Aa	M	6	2
168	浅間社	Aa	M	15	1
169	横浜弁財天社	Aa	H	54	2
170	芒村姥島	Ca	L	13	2
171	本牧塙十二天社	Aa	L	7	2
172	本牧吾妻権現宮	Aa	H	56	3
173	杉山明神社	Aa	H	7	2
174	帷子川	Ca	L	57	2
175	帷子里・神戸村・神明宮	Bc	H	71	2
176	境木	Bb	L	45	2
177	科濃坂	Bb	L	49	2
178	乗蓮寺・住吉明神社	Aa	H	16	2
179	青木明神社	Aa	L	2	1
180	弘明寺	Aa	H	43	2
181	神明宮	Aa	L	10	1
182	杉田村梅園	Bc	H	68	2
183	杉田村海鼠製	Be	L	15	2
184	能見堂	Aa	L	28	2
185	金沢勝概一覧之図	Ca	H	○	4
186	称名寺	Aa	H	76	4
187	金沢顕時墓・金沢貞顕墓	Ab	L	3	1
188	六浦日荷上人の図	Da	—	—	1
189	金沢文庫址・御所が谷	Bc	L	7	2
190	町屋村龍華寺	Aa	M	40	2
191	浦の郷	Ca	H	24	2
192	瀬戸橋・旅亭東屋	Bb	L	92	4
193	瀬戸明神社	Aa	M	37	2
194	瀬戸弁財天	Aa	H	5	1
195	金龍院飛石	Ca	L	20	2
196	六浦上行寺	Aa	H	17	2
197	待従川・光伝寺	Aa	M	31	2
198	鼻欠地蔵	Ab	L	4	1
199	三艘が浦古事	Da	—	—	2
200	雀が浦	Ca	M	26	2
201	日吉山王神社	Aa	H	96	2
202	平川天満宮	Aa	H	○	2
203	常仙寺・心法寺	Aa	H	89	2
204	柳の井	Be	L	2	1
205	桜が井	Be	L	9	1
206	霞が関	Ba	L	82	2
207	霞が関古図	Da	—	—	2
208	溜池白山祠	Aa	L	3	1
209	溜池	Ca	H	○	2
210	麻布善福寺	Aa	H	○	2

図絵番号	図絵名	図絵内容	図絵視点	登場人数	図絵枚数
211	善福寺開山了海上人誕生図	Da	—	—	2
212	麻布一本松	Cb	M	33	2
213	七仏薬師・氷川明神	Aa	H	69	2
214	霞山稲荷社	Aa	M	26	1
215	広尾祥雲寺	Aa	H	59	2
216	広尾毘沙門堂	Aa	M	11	2
217	広尾原	Ca	L	11	2
218	広尾水車	Be	L	30	2
219	鷺森神明・西光寺・氷川明神	Aa	H	68	2
220	梅が茶屋	Bb	L	16	2
221	松秀寺	Aa	H	○	2
222	花城天満宮	Aa	M	20	1
223	覚心寺・清林寺・承敬寺・上行寺・円真寺・黄梅院	Aa	H	53	2
224	正覚院	Aa	H	69	2
225	白金高野寺	Aa	H	75	2
226	雉の宮	Aa	H	14	2
227	瑞聖寺	Aa	H	35	2
228	白銀妙見堂	Aa	H	53	2
229	鎌作観音	Aa	H	26	1
230	夕日岡・行人坂	Bb	H	65	2
231	富士見茶亭	Be	L	22	2
232	太鼓橋	Be	L	28	2
233	蟠龍寺・窟弁天祠	Aa	M	16	2
234	寝釈迦堂	Aa	H	60	1
235	蛸薬師堂	Aa	M	66	2
236	目黒飴	Be	L	37	2
237	目黒不動堂	Aa	H	○	2
238	大鳥明神社	Aa	M	16	2
239	金毘羅社	Aa	H	33	2
240	千代が崎	Ca	L	17	2
241	長泉律院	Aa	H	15	2
242	祐天寺	Aa	H	55	2
243	碑文谷法華寺	Aa	H	26	2
244	奥沢村浄真寺、九品仏	Aa	H	○	2
245	満願寺	Aa	H	5	2
246	今井谷	Bc	L	3	1
247	赤坂氷川社	Aa	H	27	2
248	一木弁天・龍泉寺・松泉寺・専修寺	Aa	H	38	1
249	種徳寺	Aa	H	24	2
250	泰平観音堂	Aa	M	81	2
251	海蔵寺	Aa	H	37	2
252	熊野社	Aa	M	39	2
253	青山善光寺	Aa	H	65	2
254	笄橋	Be	L	4	1
255	渋谷長谷寺	Aa	H	33	2
256	渋谷氷川明神社	Aa	H	7	2
257	金王八幡社	Aa	H	38	2
258	金王鷹影堂	Aa	L	5	1
259	金王鷹産湯水	Ca	L	3	1
260	富士見坂・一本松	Bb	L	22	2
261	駒場野	Ca	L	8	2
262	北沢粟島社・池尻祖師堂	Aa	H	16	2
263	子明神	Aa	H	4	1
264	馬牽澤古事	Da	—	—	2
265	常盤橋	Be	L	3	1
266	世田谷豪徳寺	Aa	H	15	2
267	世田谷八幡社	Aa	H	3	1
268	氷川明神社・祷善寺・慶元寺	Aa	H	14	2
269	泉龍寺	Aa	H	13	2
270	和泉村霊泉	Ca	L	4	1
271	韋駄天山広福寺	Aa	H	14	2
272	飯室山・長者穴・長森稲荷	Ca	L	13	2
273	雪が坂	Bb	L	3	1
274	大師穴	Ca	L	6	1
275	妙楽寺・七面山	Aa	H	11	2
276	稲毛薬師堂	Aa	H	31	2
277	十三塚	Ab	H	10	1
278	橘明神社	Aa	L	8	1
279	登戸宿	Bb	H	23	2
280	登戸渡	Be	L	19	1
281	最明寺	Aa	H	23	2
282	寿源寺	Aa	H	8	1
283	中丸子羽黒権現	Aa	H	14	2
284	四谷牛頭天王社	Aa	M	17	2
285	日宗寺・戒行寺・汐干観音	Aa	H	41	2
286	篠寺	Aa	L	3	1
287	四谷大木戸	Ba	L	48	2
288	四谷内藤駅	Bb	L	48	2
289	鮫が橋	Be	L	5	1
290	権太原長禅寺	Aa	L	8	1
291	千駄谷大神宮，寂光寺	Aa	H	9	2
292	仙寿院庭中	Aa	H	○	2
293	竜岩寺庭中	Aa	M	29	2
294	千駄谷観音堂	Aa	M	27	2
295	千駄が谷八幡宮	Aa	M	41	2
296	代々木八幡宮	Aa	H	8	2
297	代太橋	Be	L	8	1
298	布多天神社	Aa	H	11	1
299	青渭社・虎狛社	Aa	L	4	1
300	狛江入道旧跡・祇園寺	Aa	H	10	1
301	深大寺	Aa	H	24	2
302	深大寺蕎麦	Be	L	6	2
303	国分寺	Aa	H	18	2
304	国分寺伽藍旧跡	Db	L	10	2
305	国分寺古河原の図	Dc	—	—	2
306	国分寺村炭がま	Bc	L	11	2
307	恋が窪・阿弥陀堂・傾城松・牛頭天王	Ca	H	9	2
308	府中八幡八幡宮	Aa	H	30	2
309	府中称名寺，弥勒寺，善明寺，高安寺	Aa	H	60	2
310	府中六所宮	Aa	H	○	3
311	五月五日六所宮祭礼之図	Ac	L	○	5
312	六所宮田植	Ac	L	42	2
313	明光院・安養寺	Aa	H	16	2
314	分倍河原陣街道	Bb	H	5	1
315	小野神社	Aa	M	5	1
316	谷保天神社	Aa	H	25	2
317	清水立場	Be	L	7	1
318	日野津	Be	L	14	1
319	芝崎普済寺	Aa	H	17	2
320	普済寺境内六角古碑	Dc	—	—	2
321	立川八幡宮，諏訪社，満願寺	Aa	H	7	2
322	多磨川	Ca	H	53	4
323	玉川猟鮎	Be	L	17	2
324	捨遺愚草の故事	Da	—	—	2
325	高幡不動堂	Aa	M	15	2
326	平村平惟盛古墳	Ab	L	3	1

図絵番号	図絵名	図絵内容	図絵視点	登場人数	図絵枚数
327	茂草松蓮寺	Aa	H	19	2
328	一宮大明神社	Aa	L	4	1
329	小山田旧関関戸惣図	Bc	H	9	2
330	関戸天守台	Ca	L	4	2
331	国安宮・威光寺	Aa	H	8	2
332	谷之口穴沢天神社	Aa	L	12	2
333	寿福寺	Aa	H	21	2
334	吐玉水	Bc	L	7	2
335	法泉寺	Aa	M	11	2
336	市谷八幡宮	Aa	H	○	2
337	薬王寺・月桂寺	Aa	H	26	2
338	大窪天満宮	Aa	M	23	2
339	大久保七面宮	Aa	H	11	1
340	諏訪谷村諏訪明神社	Aa	H	15	2
341	大久保映山紅の図	Cc	L	16	2
342	自證院	Aa	H	33	2
343	鎧明神社・円照寺	Aa	M	8	1
344	柏木邑右衛門桜	Cb	L	3	1
345	淀水車	Be	M	85	2
346	角筈村熊野十二所権現社	Aa	H	38	2
347	熊野籠	Ca	L	3	1
348	成願寺	Aa	H	17	2
349	中野塔	Ab	M	19	1
350	中野宝仙寺	Aa	H	33	2
351	桃園春興	Cc	L	10	2
352	堀の内妙法寺	Aa	H	○	2
353	大宮八幡宮	Aa	H	17	2
354	鞍懸松	Cb	L	3	1
355	井頭池・弁財天社	Ca	H	16	2
356	小金井橋春景	Cc	H	57	2
357	小金井橋	Cc	L	29	2
358	築土八幡宮・同明神社	Aa	H	45	2
359	謄喜洛陽千歳光の図	Da	—	—	2
360	牛込神楽坂	Bb	H	○	2
361	松源寺・行元寺・若宮八幡宮	Aa	H	53	2
362	赤城明神社	Aa	H	77	2
363	済松寺	Aa	H	38	2
364	若前畠神明宮	Aa	M	5	1
365	高田本松寺	Aa	H	14	1
366	誓閑寺・西方寺	Aa	H	44	2
367	高田八幡宮	Aa	H	○	3
368	高田稲荷・毘沙門堂・富士山・神泉・守宮池・宝泉寺	Aa	H	50	1
369	高田天満宮	Aa	M	10	2
370	高田馬場	Ba	L	60	2
371	太田持資の故事	Da	—	—	2
372	山吹の井	Ca	L	2	1
373	高田七面堂，朝日桜	Aa	M	15	2
374	姿見端・俤のはし	Be	L	13	2
375	高田南蔵院，鶯宿梅，氷川社，右橋	Aa	H	31	2
376	宿坂関旧址金乗院・観音堂	Aa	H	6	1
377	泰雲寺古事	Da	—	—	2
378	藤森稲荷社	Aa	M	25	2
379	一枚岩	Ca	L	3	2
380	落合惣図	Bc	H	12	2
381	落合蛍	Cc	M	42	2
382	牛天神社・牛石・諏訪明神社	Aa	H	78	2
383	金剛寺・氷川明神社	Aa	H	42	2
384	小日向上水端道祖神祠	Aa	L	6	1
385	大日坂大日堂	Aa	M	34	1
386	目白下大洗堰	Ca	M	16	2
387	芭蕉庵・五月雨塚・駒留橋・八幡宮・水神宮	Aa	H	32	1
388	道山幸神社	Aa	L	8	2
389	目白不動堂	Aa	H	57	2
390	目白坂関口八幡宮	Aa	L	3	1
391	大塚本伝寺	Aa	H	38	2
392	波切不動堂	Aa	M	41	2
393	大塚護持院，護国寺，本浄寺	Aa	H	○	6
394	護国寺境内西国札所写三十三所観音の図	Aa	H	○	5
395	清土星の清水	Be	L	8	2
396	清立院・日親堂・請雨松・宝城寺	Aa	H	21	2
397	法明寺・雑司谷鬼子母神堂	Aa	H	○	2
398	雑司谷の会式の図	Ac	L	91	2
399	麦藁細工の角兵衛獅子	Be	L	9	1
400	伝通院裏門・沢蔵主稲荷社・伝通院総門・大黒天・念仏堂	Aa	H	○	5
401	光円寺	Aa	M	7	1
402	宗慶寺・極楽水	Aa	H	33	1
403	祥雲寺・無量院	Aa	H	41	2
404	小石川白山権現社	Aa	H	25	2
405	氷川明神社・聖岡庵旧跡・祇園橋	Aa	H	25	2
406	猫狸橋	Be	L	3	1
407	巣鴨真性寺	Aa	H	23	1
408	巣鴨庚申塚	Be	L	47	2
409	十羅刹女堂	Aa	M	15	2
410	板橋駅	Bb	M	54	2
411	乗蓮寺・板橋駅	Aa	M	53	2
412	清水薬師・清水坂	Aa	H	14	2
413	松月院・大堂	Aa	H	23	2
414	吹上観音	Aa	H	25	2
415	練馬長命寺	Aa	H	30	2
416	三宝寺池・弁財天・氷川明神・石神井城址	Ca	H	7	2
417	石神井明神祠	Aa	L	4	1
418	宗岡里内川	Bc	H	35	2
419	十玉院・西蔵院・万蔵院	Aa	H	11	2
420	平林寺大門	Aa	L	16	1
421	平林寺	Aa	H	53	3
422	戴渓堂・桜車道	Aa	H	6	1
423	将軍塚・徳蔵寺	Aa	H	11	2
424	久米川	Ca	L	5	2
425	曼荼羅淵	Ca	M	7	2
426	北野天神	Aa	H	21	2
427	山口観音	Aa	H	83	2
428	山口岡	Ca	L	9	2
429	勝楽寺	Aa	H	12	2
430	堀兼井	Aa	H	27	2
431	来迎寺	Aa	M	3	2
432	車返古事	Da	—	—	1
433	所沢卯花	Bc	L	2	1
434	所沢薬王寺	Aa	H	48	2
435	戸田羽黒霊泉	Ca	L	4	1
436	戸田川渡口・羽黒権現宮	Ca	H	66	2

図絵番号	図絵名	図絵内容	図絵視点	登場人数	図絵枚数
437	焼米坂	Be	L	10	1
438	妙顕寺	Aa	H	30	2
439	調神社	Aa	M	58	2
440	三室村元簸神社	Aa	H	19	2
441	氷川宮大門先	Aa	H	34	1
442	大宮駅氷川明神社	Aa	H	52	3
443	大宮駅東光寺	Aa	M	58	2
444	黒塚・潮田出羽守城跡・同墓碑	Ab	L	21	2
445	聖堂	Ab	H	63	2
446	神田明神社	Aa	H	68	2
447	神田明神社祭礼	Ac	L	○	8
448	円満寺	Aa	M	18	1
449	霊雲寺	Aa	M	23	2
450	妻恋明神社	Aa	L	2	1
451	湯島天満宮	Aa	H	○	2
452	麟祥院	Aa	H	53	2
453	根生院	Aa	H	56	2
454	錦袋円	Be	L	24	2
455	東叡山黒門前・忍ばずの池・中島弁天社	Ba	H	○	4
456	不忍池蓮見	Cc	L	6	2
457	東叡山寛永寺	Aa	H	○	10
458	忍岡稲荷社	Aa	M	12	1
459	東叡山勧学寮図	Aa	M	3	1
460	十月二日開山堂法華八講	Ac	L	○	2
461	両大師遷座	Ac	L	○	2
462	清水堂花見図	Cc	L	35	2
463	正月三日大黒詣	Ac	L	52	2
464	螢沢	Cc	L	4	1
465	谷中感応寺	Aa	H	○	3
466	日暮里惣図	Aa	H	○	7
467	道灌山聴虫	Cc	L	6	2
468	根津権現社	Aa	H	78	3
469	三崎法住寺・妙林寺・蛍沢	Aa	H	17	2
470	根津権現旧地	Aa	H	35	1
471	駒込大観音	Aa	L	7	1
472	丸山浄心寺	Aa	H	8	1
473	吉祥寺	Aa	H	50	2
474	駒込神明宮	Aa	H	16	2
475	富士浅間社	Aa	H	10	1
476	六月朔日富士詣	Ac	L	48	2
477	田畑八幡宮	Aa	H	5	2
478	円勝寺	Aa	H	3	1
479	無量寺	Aa	H	14	2
480	平塚明神社	Aa	H	25	2
481	八幡太郎義家兄弟の図	Da	—	—	2
482	平塚白戦	Da	—	—	2
483	白鬚明神社	Aa	L	4	1
484	音無川・飛鳥山全図	Ca	H	○	5
485	飛鳥橋あたりの貨食舗	Be	M	○	3
486	王子権現社	Aa	H	65	3
487	花鎮祭祀	Da	—	—	2
488	祭礼	Ac	L	○	2
489	王子稲荷社	Aa	H	77	2
490	裳束畠・衣裳榎	Bd	L	0	2
491	十八講	Ac	L	24	2
492	松橋弁財天窟・石神井河	Ca	L	15	2
493	不動瀧	Ca	L	5	2
494	静勝寺・亀が池・五葉松	Aa	H	12	2
495	太田持資の図	Da	—	—	2
496	赤羽山八幡宮	Aa	H	5	1
497	川口善光寺	Aa	H	16	2
498	河口鍋匠	Be	L	14	2
499	鍋屋の井	Be	L	4	1
500	西福寺・梶原塚	Aa	H	21	2
501	梶原塚	Ab	L	1	1
502	紀州明神社・清光寺・若宮八幡宮・豊島川・地蔵堂	Aa	H	8	2
503	金龍山浅草寺全図	Aa	H	○	10
504	六月十五日祭礼之図	Ac	L	○	2
505	節分会	Ac	L	○	2
506	兵藤平内兵衛・二王座禅像	Ab	L	5	1
507	鎌田政清造立穴地蔵石燈籠	Ab	L	8	1
508	楊枝店	Be	L	22	1
509	一権現祠・姥が池	Aa	M	11	1
510	十二月十八日年の市	Bd	L	○	2
511	馬市	Bd	M	○	2
512	浅草寺観音大士出現の図	Da	—	—	2
513	観音大士安置の図	Da	—	—	2
514	駒形堂・清水稲荷	Aa	H	○	2
515	弘法大師の図	Da	—	—	1
516	三島明神社・諏訪明神社	Aa	H	34	1
517	正覚寺・八幡宮	Aa	H	○	2
518	御厩河岸渡	Ca	L	9	1
519	大倉前閻魔堂，牛頭天王，十王堂	Aa	H	○	2
520	祇園会篠団子	Ac	L	○	2
521	第六天・篠塚稲荷	Aa	H	18	1
522	西福寺	Aa	H	52	2
523	新堀端浄念寺，東漸寺，龍宝寺	Aa	H	33	2
524	東本願寺	Aa	H	○	3
525	報恩講	Ac	L	59	2
526	報恩寺	Aa	H	89	1
527	誓願寺・日輪寺・海禅寺・天嶽院・称往院・東光院・清水寺・慈眼院・聖徳寺・祝言寺	Aa	H	○	4
528	性信坊過去生枯骨の図	Da	—	—	2
529	広徳寺	Aa	H	84	2
530	下谷稲荷明神社	Aa	M	40	2
531	山下・五篠天神祠	Ba	H	○	4
532	常楽院	Aa	L	20	1
533	東叡山坂本口	Ba	H	33	1
534	入谷庚申堂	Aa	L	2	1
535	小野照崎明神社	Aa	M	2	1
536	金杉安楽寺	Aa	H	11	2
537	根岸円光寺	Aa	M	43	2
538	呉竹の根岸の里	Ba	L	5	2
539	晴雨岡不動堂	Aa	L	5	2
540	正燈寺丹楓	Cc	M	32	2
541	山谷熱田明神社	Aa	M	9	2
542	駿馬塚	Ab	L	3	1
543	飛鳥社・小塚原天王宮	Aa	H	56	2
544	千住川	Ca	H	62	2
545	光茶銚	Be	L	4	2
546	六阿称陀廻	Be	L	29	2
547	西新井大師堂	Aa	H	29	2
548	梅田天神祠・不動堂・別當明王院	Aa	H	9	2

図絵番号	図絵名	図絵内容	図絵視点	登場人数	図絵枚数
549	鷲大明神社	Aa	H	○	2
550	鷲大明神祭	Ac	L	8	2
551	石浜神明宮・真崎稲荷祠・思河・橋場渡・総泉寺・同薬師・妙亀明神社・浅茅が原・玉姫稲荷・法源寺・鏡が池	Aa	H	○	9
552	角田河渡	Da	—	—	2
553	正平七年隅田河合戦之図	Da	—	—	4
554	水鶏の図	Cb	L	2	2
555	長昌寺	Aa	H	26	2
556	今戸八幡宮	Aa	H	5	1
557	今戸焼	Be	L	4	1
558	山谷堀・今戸橋・慶養寺	Aa	H	55	2
559	真土山聖天宮	Aa	H	58	2
560	新吉原町	Ba	H	○	2
561	新吉原仲之町八朔図	Bd	L	66	2
562	富岡八幡宮	Aa	H	○	6
563	永代寺山開	Cc	M	○	4
564	二件軒茶屋雪中宴之図	Be	L	18	2
565	三十三間堂	Aa	L	63	2
566	洲崎弁財天社	Aa	H	78	2
567	砂村富岡元八幡宮	Aa	H	5	2
568	深川木場	Ba	H	42	2
569	海福寺	Aa	H	33	2
570	深川霊雲院	Aa	H	79	2
571	芭蕉庵	Da	—	—	1
572	本所弥勒寺	Aa	H	66	2
573	本所一目弁財天社，深川八幡御旅所	Aa	H	○	2
574	回向院	Aa	H	○	2
575	回向院開帳参	Ac	L	○	2
576	猿江泉養寺の蓮花	Cc	L	2	1
577	猿江摩利支天祠	Aa	M	5	1
578	小名木川・五本松	Ca	L	40	2
579	五百羅漢寺三匝堂	Aa	H	○	3
580	五百羅漢堂内相之図	Aa	L	○	10
581	羅漢堂護法神宮	Aa	L	9	1
582	亀戸宰府天満宮	Aa	H	○	3
583	二月二十五日菜種神事	Ac	L	58	2
584	亀戸天満宮祭礼神輿渡御行列之図	Ac	M	○	4
585	普門院	Aa	H	7	1
586	亀戸邑道祖神祭	Ac	L	23	2
587	梅屋敷	Cc	M	71	2
588	入神明宮・大平榎	Aa	M	3	1
589	香取太神宮	Aa	H	7	2
590	常光寺	Ac	L	40	2
591	吾嬬森・吾嬬権現・連理樟	Aa	H	15	2
592	日本武尊の故事	Da	—	—	2
593	龍眼寺	Cc	L	27	2
594	柳嶋妙見堂	Aa	H	○	2
595	押上最教寺	Aa	H	8	1
596	鎌倉将軍惟康親王蒙古夷賊退治の図	Da	—	—	4
597	押上法恩寺，霊山寺	Aa	H	49	2
598	瓦師	Be	L	12	2
599	業平天神祠・中郷第六天八幡宮	Aa	M	29	1
600	多田薬師堂	Aa	H	53	2
601	中之郷さらし井	Be	L	7	1
602	中郷最勝寺，神明宮，太子堂	Aa	H	44	2
603	大川橋	Ca	H	○	2
604	三囲稲荷社	Aa	H	89	2
605	牛御前宮・長命寺	Aa	H	94	3
606	弘福禅寺	Aa	H	17	2
607	庵崎	Bc	M	91	2
608	請地秋葉権現宮・千代世稲荷社	Aa	H	71	2
609	寺島太子堂，蓮花寺	Aa	H	8	1
610	白髭明神社	Aa	L	5	2
611	隅田川渡	Ca	H	○	2
612	隅田川堤春景	Cc	L	62	2
613	木母寺・梅若塚・水神宮・若宮八幡	Aa	H	88	3
614	梅若丸の故事	Da	—	—	2
615	鐘が潭・丹鳥の池・綾瀬川・牛田薬師堂，関屋里・関屋天満宮	Bc	H	54	5
616	葛西の辺	Bc	L	3	2
617	渋江西光寺，清重稲荷	Aa	H	39	2
618	木下川薬師堂	Aa	H	24	2
619	木下川薬師如来像の故琴	Da	—	—	2
620	中川口	Ca	M	29	2
621	中川釣鱉	Cc	L	14	2
622	平井聖天宮	Aa	H	31	2
623	立石南蔵院，熊野祠	Aa	H	13	2
624	立石村立石	Ca	L	3	1
625	葛西六郷墳墓	Ab	L	3	1
626	東一之江妙音寺	Aa	H	2	1
627	二之江妙勝寺	Aa	H	23	2
628	今井の津頭	Ca	L	8	2
629	今井浄興寺，琴弾松	Cb	M	3	1
630	北條左京太夫氏康の図	Da	—	—	2
631	新宿渡口	Be	L	13	1
632	夕顔観音堂	Aa	M	19	2
633	半田稲荷社	Aa	H	21	2
634	松戸の里	Bc	H	44	2
635	行徳船場	Bb	M	○	2
636	行徳徳願寺	Aa	H	68	2
637	行徳汐浜	Bc	M	32	2
638	行徳塩竈之図	Be	L	13	2
639	行徳衙	Cb	L	12	2
640	市川渡口・根本橋・利根川	Ca	H	52	2
641	国府台総寧寺，古戦場	Aa	H	23	3
642	総寧寺羅漢井	Be	L	7	2
643	国府台断崖之図	Ca	L	10	2
644	国分寺	Aa	M	11	2
645	鏡意思	Ca	L	2	1
646	真間弘法寺	Aa	H	40	3
647	梨園	Cb	L	4	1
648	八幡不知森・八幡八幡宮	Aa	H	17	2
649	妙法華経寺・高石明神社	Aa	H	84	4
650	葛飾明神社・栗原宝成寺	Aa	H	12	2
651	勝間田池	Ca	H	18	2
652	意富日神社旧地	Aa	L	4	1
653	船橋駅天道念仏踊之図	Ac	L	8	1
654	船橋意富日神社	Aa	H	○	3
655	意富日神社九月廿日祭祀之図	Ac	M	44	2
656	茂侶神社	Aa	H	11	2

表2　『江戸名所図会』図絵内容分類

	図絵数		内訳	
宗教関係	402	(61.3%)	寺社	356
			寺社以外	15
			年中行事	31
社会関係	135	(20.6%)	市街	30
			街道	19
			村落	15
			年中行事	5
			その他	66
自然関係	81	(12.3%)	自然地形	53
			動植物	8
			年中行事	20
歴史関係	38	(5.8%)	故事	35
			旧跡	1
			古物	2

表2は『江戸名所図会』図絵の行楽内容を示したものである。宗教関係の図絵が402図(全体の61.3%)で，そのうち356図が寺社である。このことは，江戸住民の行動文化にとって，寺社が重要な意味を持っていたことを示す。行楽地としての寺社地には，宗教要素（本尊・御神体，霊験・御利益，儀礼・祭礼・縁日）のみならず，立地要素（水辺・高台・街道往還・江戸周辺・自然景観），歴史要素（伝統権威・歴史的人物・事件），世俗要素（娯楽施設・見世物・市・盛り場）という複数の意味が含まれている[16]。それゆえに宗教関係の行楽地，とくに寺社地は行動文化の中心的役割を担うといえる。また，都市のプランニングにおいて，階級的ゾーニングの系列の外に，寺社地があったという点も重要である。

人々が自由に日常の規制から解放されて行楽を楽しむためには，行楽地は日常生活とは別の次元に属することが必要であり，寺社はその要件をみたす[17]。その点から考えても行動文化における行楽地としての寺社の特性を見出すことができる。なお，宗教関係の寺社以外の行楽内容は，湯島聖堂・墓・塚などである。また，宗教関係の年中行事図絵は31図であるが，これらは江戸の主要な宗教関係年中行事であったと考えることができる[18]。

社会関係のものは135図絵（20.6%）となっている。単純な比較はできないが，寛文年間の『江戸名所記』では，市街で名所として取り上げられた地点は皆無である[19]。これに対し，『江戸名所図会』では市街が名所として30地点描かれている。『江戸名所記』刊行以後約170年間に，都市空間における名所認識が大きく変化したことを示すと考えられる。なお，その他の66図絵[20]は橋・店・渡し場・井戸・名産などである。

自然関係の図絵は81図（12.3%）で，そのうち山・海・池・川・滝・岩などの自然地形に関するものが53図絵を占める。寺社地などの宗教関係行楽地の数と比べると少ないが，自然関係の図が全体の約1割あることは注目できる。自然のなかに遊びの場を求めることは，人為的なもののなかで生きる者のみがもつ，対象化された自然を前提としてだけ生まれる行為の様式であり[21]，ここに都市住民の行楽の特色をみることができる。また，歴史関係の図絵が38図でそのうち35図が故事に関する表現である。

以上のように，『江戸名所図会』図絵内容からみれば江戸の行楽地は宗教関係，社会関係，自然関係，歴史関係の4つに分類できる。特に社会関係と自然関係の図絵の合計が32.9%で，宗教関係の図絵の割合61.3%の半分以上であり，行楽内容の多彩化がみられる。

表3は『江戸名所図会』図絵の視点別分類である。図1のように図絵の視点が高所のもの，図2のように図絵の視点が中位のもの，図3のように図絵の視点が低いものと高中低の三分類をした。そのうち図絵の視点が高，中であるも

表3　『江戸名所図会』図絵視点別分類

	図絵数	比率
図絵視点　高	306	65.4%
図絵視点　中	98	
図絵視点　低	214	34.6%

注）歴史関係の38図を除いた618図の分類である。

図１　図絵の視点＜高＞　　（図絵番号 180）

図２　図絵の視点＜中＞　　（図絵番号 101）

図３　図絵の視点＜低＞　　（図絵番号 137）

表4　『江戸名所図会』図絵内容別俯瞰図の割合

	図絵数	俯瞰図数（比率,%）	
宗教関係	402	328	(81.6)
社会関係	135	46	(34.1)
自然関係	81	30	(37.0)

注）俯瞰図は図絵が高，中視点から描かれたものを指す。

のを俯瞰図とした[22]。表3からわかるように俯瞰図は高視点が306図，中視点が98図のあわせて404図（全体の65.4%）ある。これらを図絵内容別にまとめたものが表4である。宗教関係の図絵は328図で，このうちの81.6%が俯瞰図である。社会関係の34.1%，自然関係の37.0%と比較してもその割合は極めて高い。

高所より大観する構図が多く採られたのは，この描法が個別寺社の境内等における建物の配置や，複数の名所や寺社の相対的位置，つまり周辺との配列を示すのに有効であったからであり，俯瞰図は名所案内の地図的役割を果たしていたといえる[23]。この点からすれば，俯瞰図は，江戸住民に対してより詳細な情報を伝達しようとする長谷川雪旦の態度が反映したと考えることができる。絵師は，絵と地図の中間形態である俯瞰図により，美しく楽しい形で地誌的情報を提供したのである[24]。

表5は『江戸名所図会』の各図絵中に登場する人の数を示したものである。図絵中の登場人数は，それが描かれた時期や時間さらには絵師の主観性も関わっていると思われる。しかし『江戸名所図会』の図絵は，実地の写生によって描かれたものであり[25]，ある程度は行楽地の実態を表現している。そこで本稿では，図中の人数を3段階に分け，それによって行楽地における人の集中度をみることにした。

図絵中に見られる識別可能な人の数は表1にあげたが，これを1～50人，51～100人，101人以上とまとめたものが表5で，50人以内が408図で全体の66%である。101人以上の多人数が登場する図絵は109図ある[26]。多人数登場図絵が100図以上あることは，行動文化に参加する人々が多数であったことを示し，近世後期の文化の大衆化をはっきりと表している。表5によって，各行楽地の人の密集度には相違がみられることがわかった。

表5　『江戸名所図会』図絵登場人数

図絵登場人数	図絵数（全図絵数における比率,%）	
1～50人	408	(66.0)
51～100人	101	(16.3)
101人～	109	(17.6)

注）歴史関係の図絵38図を除いた618図の分類である。

『江戸名所図会』の各図絵の枚数を分類したものが表6である。2枚で構成されている図絵が418図，1枚の図絵が151図と，1枚と2枚で大部分をしめるが，3枚で構成された図絵も20図，4枚で12図，5枚で5図，6枚で6図，7枚，8枚，9枚が各1図，そして10枚構成が3図ある。3～10枚の多枚数図は全部で49図あるが[27]，このうち45図（91.8%）は俯瞰図である[28]。

俯瞰図は地図的要素をもつものであり，俯瞰図を構成する図絵の枚数が多いということは，それだけその行楽地の規模が大きいということを意味する。多枚数で構成された図絵の9割以上が俯瞰図であり，そのほとんどが寛永寺や浅草寺に代表されるような大規模行楽地である。行楽地の規模の違いが，図絵構成枚数の差として表れたと解釈できる。

Ⅲ．江戸行楽地の地域的特色

(1)　江戸の行楽地域

『江戸名所図会』は巻の1から巻の7まである。巻の1は表1の図絵番号1から95までを含み，神田・日本橋・京橋・芝・高輪に至る地域である。巻の2は図絵番号96から200で，品川東海寺に始まり，大森・川崎・鶴見・神奈川・保土ケ谷・杉田を経て金沢・六浦の地域である。巻の3は図絵番号201～335で，麹町より麻布・白金・目黒・碑文谷・奥沢方面，または赤坂門より青山を経て渋谷・世田谷・喜多見・多摩丸子渡しまで，さらに四谷・新宿・千駄ケ谷・代々木より甲州街道沿いに高井戸・深大寺・国分寺・府中を経て，多摩川をわたり高幡・百草・関戸・

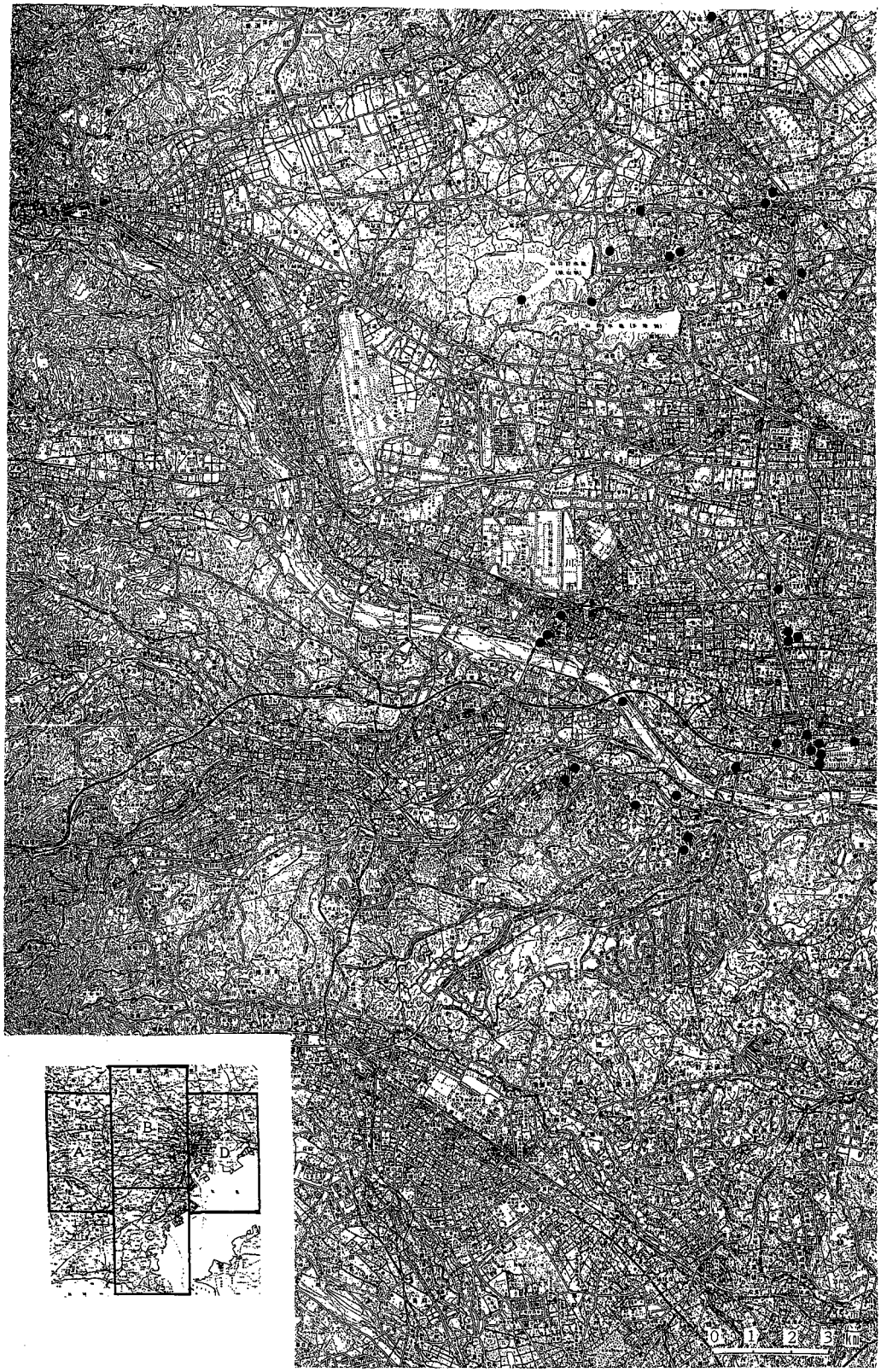

図４Ａ　『江戸名所図会』行楽地分布図（国土地理院「５万分の１地形図」より作成）

図４Ｂ　『江戸名所図会』行楽地分布図（国土地理院「５万分の１地形図」より作成）

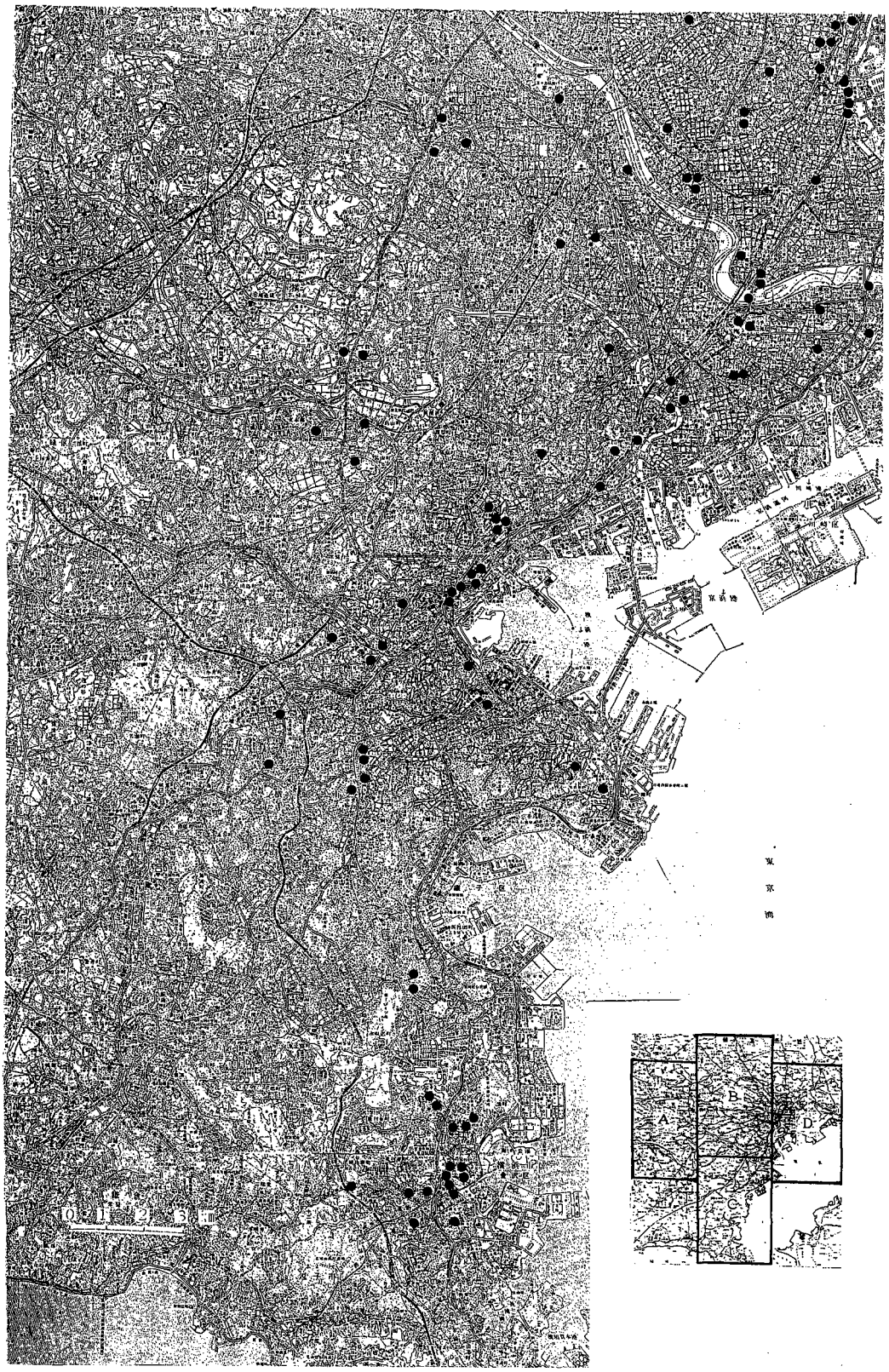

図４Ｃ　『江戸名所図会』行楽地分布図（国土地理院「５万分の１地形図」より作成）

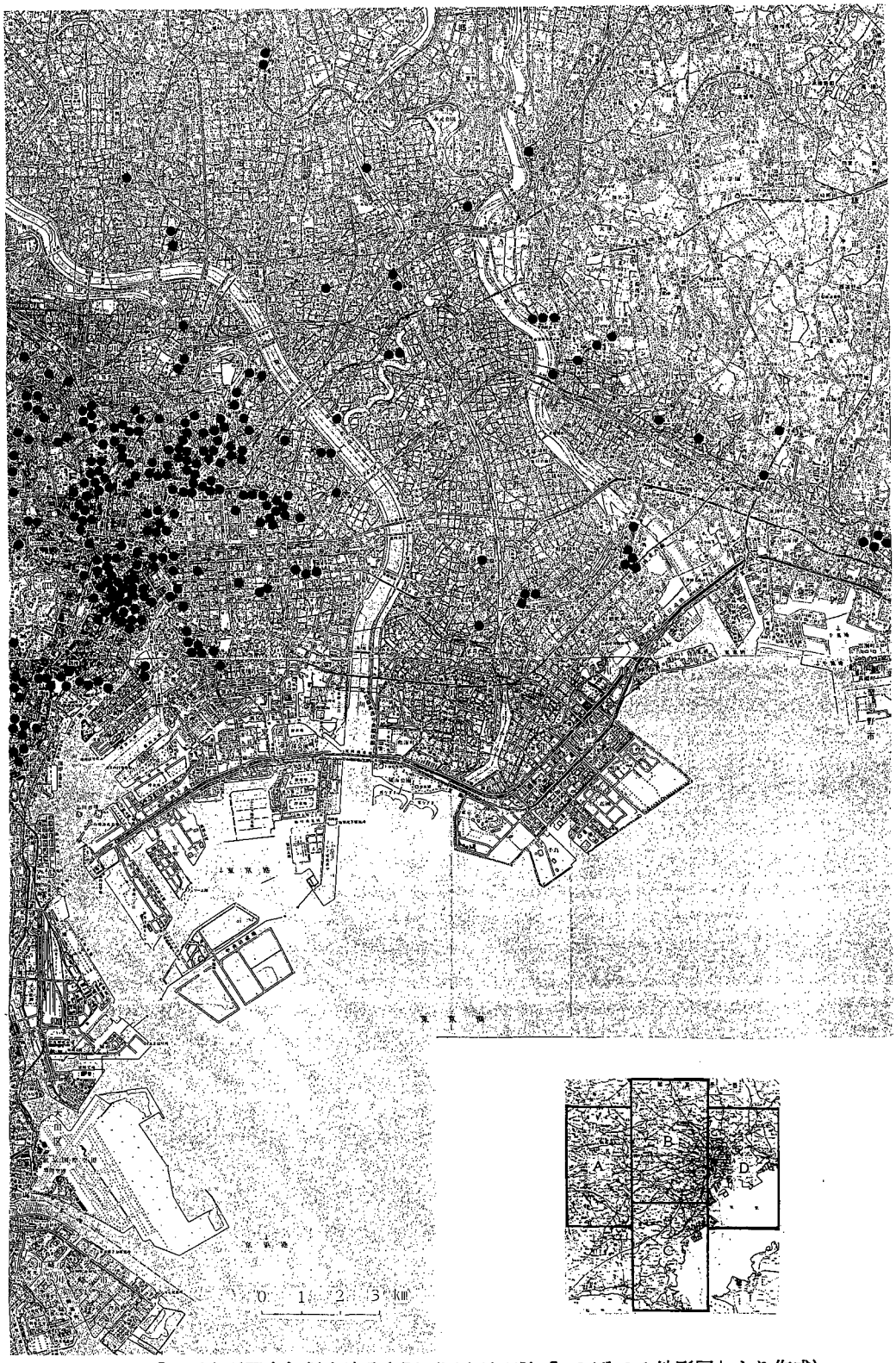

図４Ｄ　『江戸名所図会』行楽地分布図（国土地理院「５万分の１地形図」より作成）

矢野口方面の地域である。巻の4は図絵番号336より444で，市谷より青梅街道沿いに大久保・中野を経て小金井に至る地域と，神楽坂より早稲田を経て神田川を落合まで，または小石川より神田上水沿いに目白方面へ，小石川・大塚より中山道沿いに板橋を経て石神井・練馬方面，さらに狭山・所沢，浦和・大宮を含む地域となる。巻の5は図絵番号445から502で，湯島聖堂より谷中・日暮里を経て道灌山に至る地域と，根津・駒込より西ケ原・飛島山を経て王子権現に至り，さらに赤羽・川口・豊島の地域を含む。巻の6は図絵番号503～561で，浅草寺より駒形・下谷・根岸・千住を経て西新井，さらに浅草寺の裏手，今戸・橋場辺から新吉原に至る地域である。そして巻の7は木場・亀戸・押上など本所深川から隅田川東岸の諸寺社や立石・松戸・行徳・市川・船橋の地域で図絵番号は562から656である。

以上のように巻の1から巻の7にあげられた各行楽地はそれぞれ地域としてまとまりを持つが，これらの『江戸名所図会』の挿絵656図の分布を示したものが図4である[29]。図4からいえることは，東は船橋，西は所沢・日野，北は大宮，南は金沢・六浦というように，行楽地の分布が広範囲となっている点である。

このような行楽地域の拡大傾向は，享保17年（1732）の『江戸砂子』，享保18年（1733）の『江戸名勝志』，寛政年間の『江戸志』などにみられるように，すでに18世紀以降よりあらわれているが[30]，とくに『江戸名所図会』の行楽地は上述のようにきわめて広い地域にわたっている[31]。このことは，江戸周辺農村が江戸の外周生活圏としての役割を果たしたことを示しているのであるが[32]，都市の側から考えるならば，この行楽地域の拡大は，交通網の発達や流通，都市人口の増加による都市域の拡大などを背景とした江戸の人々の経済的交流の広がりと，文化的行動の活発化と関係しているといえる[33]。

また，巻の1から巻の7の7地域は，江戸の地域構造と密接に関わっている。巻の1は江戸の中心的町屋地域と重層性をもつ。巻の2の地域は東海道を中心とした地域。巻の3は甲州道中，大山街道。巻の4は中山道，青梅街道，川越街道。巻の5は岩槻街道。巻の6は奥州・日光道中。そして巻の7は本所・深川，佐倉街道を中心とした地域であることがわかる。このことより『江戸名所図会』の行楽地は江戸の地域構造を基盤とした上で分類されていると考えられる。

そこで巻の1から巻の7までの行楽地域を，それぞれ第1行楽地域，第2行楽地域，第3行楽地域，第4行楽地域，第5行楽地域，第6行楽地域，第7行楽地域と設定した。各行楽地域の地域別行楽内容を示すのが表7であるが，各行楽地域の地域的特色をまとめると以下のようになる。

①第1行楽地域…社会関係の図絵が45図で社会関係の図絵のしめる割合は各行楽地域中最も高い47.4％であり，この地域が町屋を中心とした行楽地域であることがわかる。寺社地の割合は全行楽地域のなかで最も低い4割程度である。年中行事関係の図絵は11で多い。

②第2行楽地域…宗教関係の行楽地が60％をこえる。社会関係の図絵は18.1％で，それらは街道，茶屋，橋，渡し場等，街道に関するものが中心となっている。自然関係の図絵も全体の15.2％を占める。

③第3行楽地域…宗教関係の行楽地が65.2％である。また街道関連の場所を中心とした社会関係の図絵が20％強である。

④第4行楽地域…宗教関係の行楽地が約68％である。滝，池，川，泉，螢，桜，桃等の自然関係の行楽が16.5％で宗教関係とあわせるとこの行楽地域の行楽の85％近くになる。

⑤第5行楽地域…宗教関係の行楽地が70.7％と高い割合である。

⑥第6行楽地域…宗教関係の行楽地が65％弱である。社会関係の図絵は18.6％で市街関連のものが多い。

⑦第7行楽地域…宗教関係の行楽地が60％である。自然関係のものが20.0％で全行楽地域中最も高い割合である。また年中行事の図絵が13図（宗教関係7図，自然関係6図）あり

表6　『江戸名所図会』図絵枚数

図絵枚数	1枚	2枚	3枚	4枚	5枚	6枚	7枚	8枚	9枚	10枚
図絵総数	151図	418図	20図	12図	5図	6図	1図	1図	1図	3図

注）歴史関係の38図を除いた618図の分類である。

表7　地域別行楽内容

	第1行楽地域	第2行楽地域	第3行楽地域	第4行楽地域	第5行楽地域	第6行楽地域	第7行楽地域	合　計
宗教関係	40	64	88	74	41	38	57	402
	(42.1)	(61.0)	(65.2)	(67.9)	(70.7)	(64.4)	(60.0)	(61.3)
寺社	32	58	84	71	32	30	49	356
寺社以外	0	5	2	2	2	3	1	15
年中行事	8	1	2	1	7	5	7	31
社会関係	45	19	28	13	6	11	13	135
	(47.4)	(18.1)	(20.7)	(11.9)	(10.3)	(18.6)	(13.7)	(20.6)
市街	21	0	2	1	1	4	1	30
街道	2	7	7	2	0	0	1	19
村落	0	3	4	3	0	0	5	15
年中行事	1	0	0	0	1	3	0	5
その他	21	9	15	7	4	4	6	66
自然関係	5	16	12	18	7	4	19	81
	(5.25)	(15.2)	(8.9)	(16.5)	(12.1)	(6.8)	(20.0)	(12.3)
自然地形	3	12	11	11	3	2	10	53
動植物	0	2	1	2	0	1	3	8
年中行事	2	2	0	5	4	1	6	20
歴史関係	5	6	7	4	4	6	6	38
	(5.25)	(5.7)	(5.2)	(3.7)	(6.9)	(10.2)	(6.3)	(5.8)
故事	5	6	4	4	4	6	6	35
旧跡	0	0	1	0	0	0	0	1
古物	0	0	2	0	0	0	0	2

注）括弧内はパーセント，合計は行楽内容別を示す。

全行楽地域中最も多い。

上記の地域的特色からみると，江戸の行楽地域は，2つのタイプに分類できる。1つは，江戸のおもな町人居住地域の第1行楽地域であり，この地域は社会関係の行楽地が多い。第2の類型は，第1行楽地域の周辺に位置し，江戸の郊外にまで続く。寺社地を中心とした行楽地域で，第2～7行楽地域がそれに相当する。このタイプの行楽地域は，図4からもわかるように，かなり広い範囲にわたって分布している。『江戸名所図会』の刊行された19世紀には，おそらく多数の都市住民が郊外へおもむいたと推定できる。過密な居住空間に住む人々が，郊外への出遊を行うことは，日常的な生活からの一時の解放を約束するハレの行事となることを意味している[34]。郊外にむけて空間的移動をすることによって，日常的世界から行楽的世界へと移行した，多数の都市住民の文化的行動が，『江戸名所図会』の広範囲の行楽地分布に反映したと解釈できる。

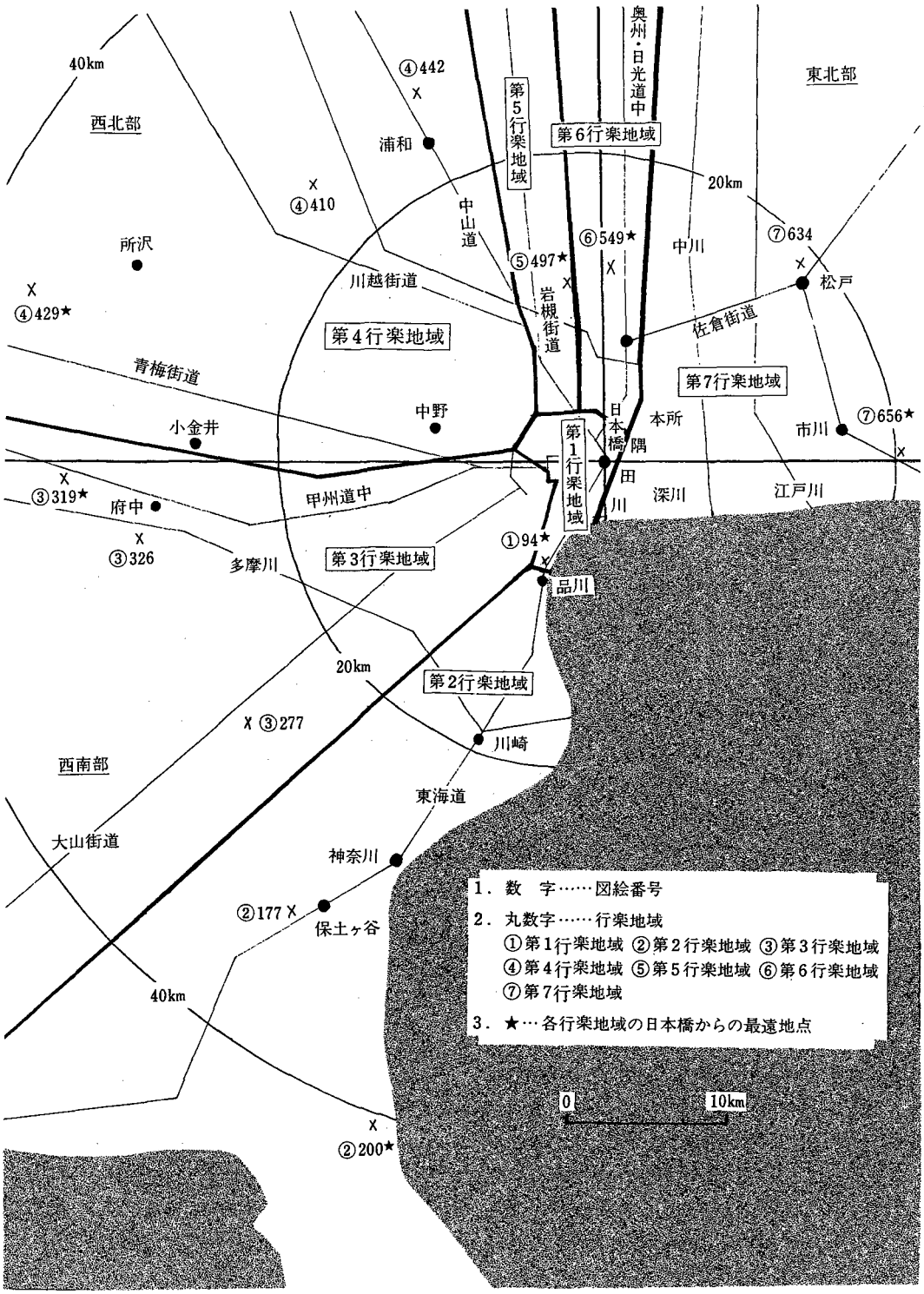

図5　江戸行楽地域と遠距離行楽地

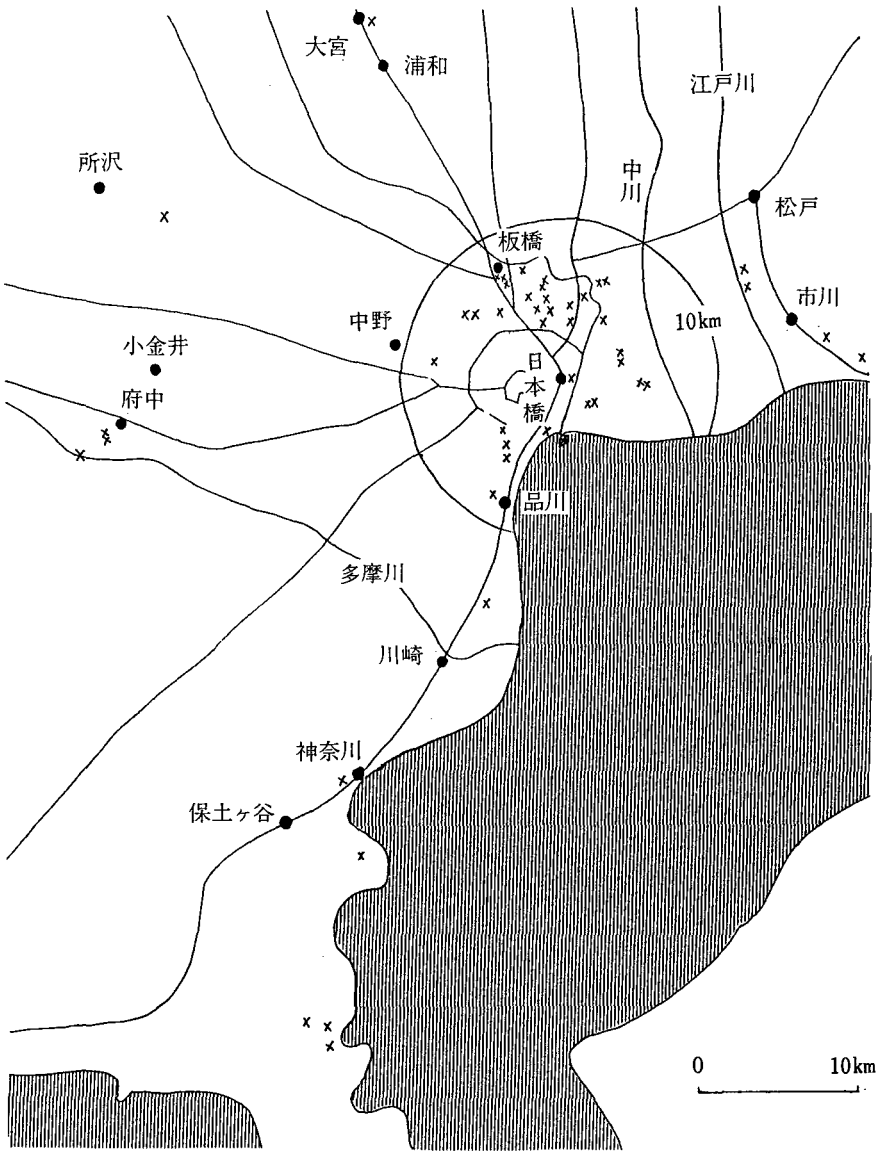

図6　密集行楽地の分布

(2)　行楽地の分布の特色

『江戸名所図会』の行楽地域と行楽地の分布範囲を示したものが図5である。第1行楽地域を中心として，周辺に第2～7行楽地域が位置することは前述した。しかし，方向別にみた場合，江戸西南部は第2・第3行楽地域，西北部は第4・第5行楽地域，東北部は第6・第7行楽地域となっている。江戸西部方面における日本橋からの最遠地点は，第2行楽地域が雀が浦（図絵番号200），第3行楽地域は普済寺（図絵番号319），第4行楽地域が勝楽寺（図絵番号429），第5行楽地域が善光寺（図絵番号497）となっていて，その分布範囲は半径40km以内である。

これに対して江戸の東北部は，第6行楽地域の鷲大明神社（図絵番号549），第7行楽地域の茂侶神社（図絵番号656）のように，日本橋より半径約20km以内に行楽地が位置している。この

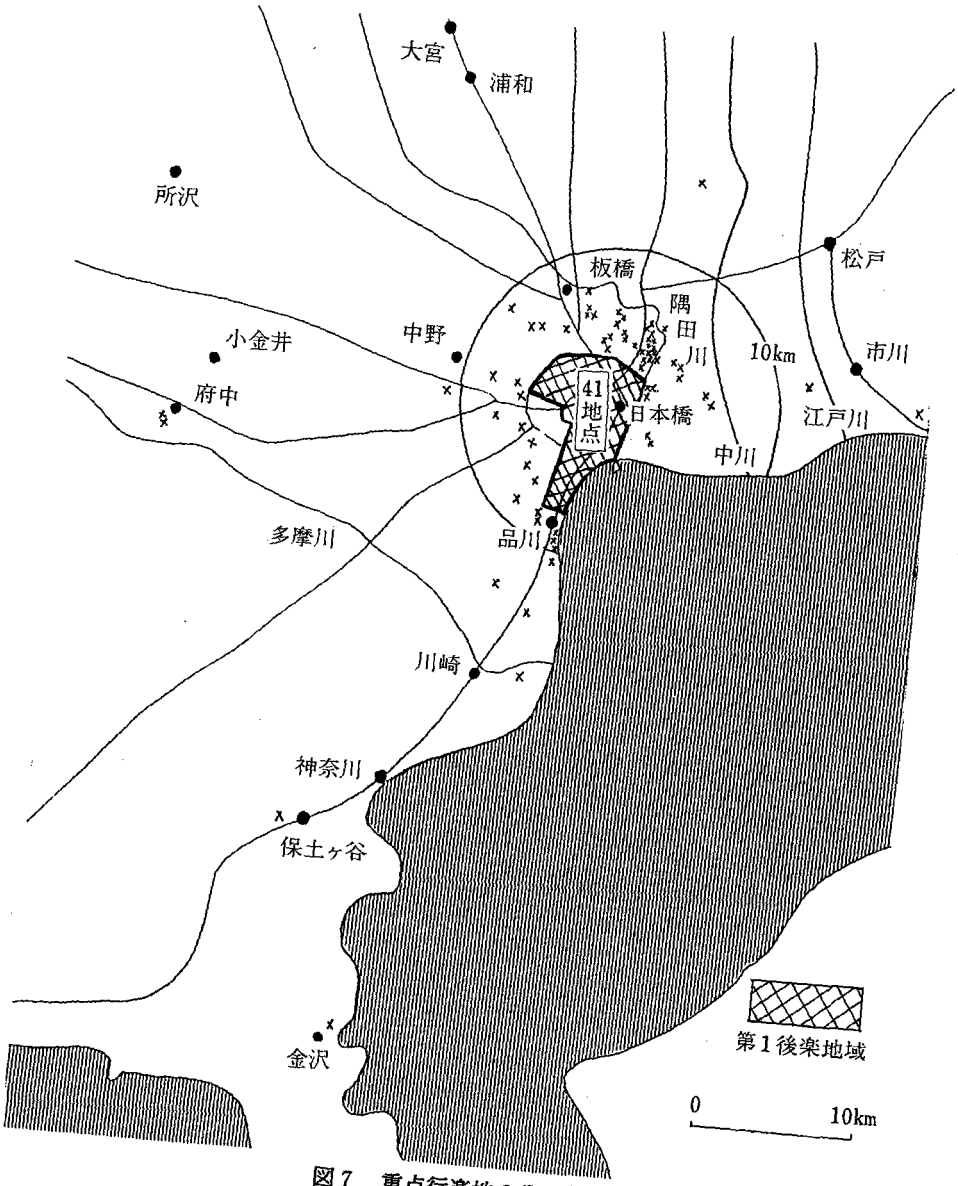

図7　重点行楽地の分布

ように，行楽地の分布には東西性がみられるが，この東西性の意味は，『江戸名所図会』の名所選択基準，山の手や下町の地域拡大などの検討が必要であり今後の課題といえる。

次に『江戸名所図会』の図絵に登場する人数が101人以上のものである行楽地に注目してその分布をみる。図絵に登場する人数が101人以上の図絵は表1中に109図絵を数える。このような行楽地を密集行楽地と呼ぶことにする。この密集行楽地の分布を示したものが図6であるが，109図絵中97図（89.0%）が日本橋から10km以内に存在する。この97図の内41図（42.3%）は，第1行楽地域に存在する。特に第1行楽地域の41図絵の内40図は，日本橋より5km以内に位置する。

図絵枚数が3枚以上の連続した図絵として描かれた行楽地は大規模であり，重点的に描かれたものと考えうる。そこで，図絵枚数が3枚以

上の図絵である行楽地を，重点行楽地と呼ぶことにした。この重点行楽地の分布を示したものが図7である。重点行楽地は49図あるが，その中で34図（69.4%）が日本橋より半径10km以内に分布している。

全体的な行楽地の分布範囲，密集行楽地の分布，重点行楽地の分布の特色を述べてきたが，行楽地は決して単純に平均的に分布していない。まず，日本橋より半径5km以内に第1行楽地域における密集行楽地が集中して存在し，次に日本橋より半径10km以内に密集行楽地と重点行楽地が分布する。そして，江戸の行楽地全体として西部40km以内，東部20km以内に分布している。このことから江戸の行楽地域には，行楽地分布の三重構造が存在するといえる。江戸は中心部と周辺部というかなり明確な二重構造をもっている，いわば複合都市であり[35]，このような都市構造が行楽地分布の重層構造に反映していたのである。

IV. 結　語

本論では，『江戸名所図会』を用いて近世後期における江戸住民の行楽行動の特徴について検討を行い，江戸の行楽地の地域的特色を考察し，以下の結論を得た。

第1に，近世後期の行動文化における行楽地は寺社地が中心的役割を果たしていた。『江戸名所図会』の656図のうち6割程度が寺社関連であることからも，寺社地の行楽地としての重要性がうかがえる。寺社地を代表とする宗教関係の図絵の約80%は，俯瞰図である。俯瞰図は，建物の位置や配列を理解するのに有効な図であり，寺社地などの全体的配置を知るのに適切な視点である。このような視点が寺社地に多くとられていたことは，名所としての寺社地の特性であるといえる。また『江戸名所図会』では，寺社地以外に市街・街道・村落・橋・店などの社会関係や，山・海・川・池・動植物などの自然関係の行楽の図絵も全体の3割強であり，近世後期の行動文化の行楽地は，寺社地を中心としつつも多様なものとなっていた。

第2に，江戸の行楽地は，江戸の地域構造との関わりにおいて7つの行楽地域に分けることができ，各行楽地域は個有の特色を持っていた。第1行楽地域は江戸の日本橋・京橋等を中心とした町屋地域。第2行楽地域は東海道。第3行楽地域は甲州道中・大山街道・第4行楽地域は中山道・青梅街道・川越街道。第5行楽地域は岩槻街道。第6行楽地域は奥州・日光道中。第7行楽地域は本所・深川地区および佐倉街道のように，それぞれを中心とした行楽地域である。第1行楽地域は，市街を中心とした行楽地域である。第2～7行楽地域は宗教関係行楽地を主とした地域であるが，これらの地域はそれぞれの地域的特色がみられる。

第3に，江戸の行楽地の地域的分布パターンには，三重構造がみられた。日本橋より半径5km以内における第1行楽地域の密集行楽地の地域，次に日本橋より半径10km以内の密集行楽地および重点行楽地の地域，そして江戸行楽地全体として半径40km以内の西部地域や半径20km以内の東部地域というように行楽地の特徴によってその分布に三重構造がみられた。

今後の課題として，『江戸名所図会』に掲載された名所の客観性と主観性の検討，行楽地分布の地域区分と各地域内の詳細な検討，行楽地の季節的および時代的な変化の解明などがある。

（東京学芸大学・院）

［注］

1）その代表的研究として，西山松之助編（1972～78）：『江戸町人の研究』第1巻～5巻．吉川弘文館，があげられる。

2）玉井哲雄（1989）：都市空間論の展開（村上直編『日本近世史事典』東京堂出版），134頁。

3）内藤昌（1966）：『江戸と江戸城』．鹿島出版会，244頁。

4）松本豊寿（1967）：『城下町の歴史地理学的研究』．吉川弘文館，474頁。

5）竹内誠（1983）：江戸の地域構造と住民意識（豊田武他編『講座　日本の封建都市』第2巻．文一総合出版），291～315頁所収。

6）松本四郎（1983）：『日本近世都市論』．東京大学出版会，327頁。

7）加藤貴(1984)：名主役料からみた江戸の地域構造．歴史地理学125，1～19頁。

8）中川徳治(1965)：江戸市民の行楽半径．国学院雑誌66，88～93頁。

9）「行動文化」とは，西山松之助の設定した概念で，神社・仏閣への参詣，名所を訪ね歩く旅行，納涼，祭礼，開帳や，茶の湯，いけ花，おどり等遊芸などの文化的行動をする文化人口が莫大な数になった江戸後期，特に文化文政以降の文化現象を把握する概念である。「行動文化」は遊芸文化の諸領域と，遊芸以外の広汎な文化領域に著しく進展したものと二分類できる。西山松之助(1975)：江戸の町名主斎藤月岑(『江戸町人の研究』第4巻吉川弘文館)，460～462頁。

本稿では行楽地を扱うため後者の遊芸以外の行動文化を対象とした。

10）図絵の分類基準においては，連続した場面のものを一つの図として数えた。

11）国史大辞典編集委員会編（1980）：『国史大辞典』第2巻．吉川弘文館，344～345頁。

12）水江漣子(1974)：初期江戸の案内(西山松之助編『江戸町人の研究』第3巻所収．吉川弘文館)，39～40頁，および水江漣子（1977）：『江戸市中形成史の研究』．弘文堂，356頁。

13）前掲12)，水江（1977)，352頁。

14）前掲13)，353頁。

15）なお，鈴木章生（1988）は，『江戸名所図会』，『東都歳事記』，『武江年表』の三作を分析し，これらがどのような目的で書かれたかを明らかにしている。鈴木章生（1988)：斎藤月岑の江戸認識．立正大学大学院年報　第5号，15～29頁。

16）鈴木章生(1990)：名所記にみる江戸周辺寺社への関心と参詣（地方史研究協議会編『都市周辺の地方史』所収．雄山閣)．124頁。

17）小野佐和子（1992)：『江戸の花見』．築地書館，89～90頁。

18）ただし，社会関係の年中行事や自然関係の年中行事も含めた江戸の年中行事についての分析は，斎藤月岑の『東都歳事記』などを資料として，詳細に検討していく必要がある。

なお寺社地の行楽的機能については，山近博義（1991)：近世後期の京都における寺社境内地の興行地化．人文地理43-5，25～45頁，および山近博義（1993)：近世京都における寺社地と市街地形成．奈良女子大学文学部研究年報　第37号，19～36頁，で京都を事例に詳細に述べられている。

19）前掲8)，89頁。

20）その他66図絵の図絵番号は，4，7，9，15，16，17，18，21，26，29，35，36，41，47，48，50，52，53，57，58，59，100，130，131，132，135，137，149，150，183，204，205，218，231，232，236，254，265，280，289，297，302，317，318，323，345，374，395，399，406，408，437，454，485，498，499，508，545，546，557，564，598，601，631，638，642である。

21）中井信彦（1990［初版1975］)：『日本史の社会集団』第5巻　町人．小学館，461頁。

22）ここでは，鳥瞰図の定義を一点透視画法であることとし，このことから俯瞰図の表現をとった。矢守一彦（1984)：『古地図と風景』．筑摩書房，79，203頁。

23）前掲22)，79，88頁。

24）前掲22)，29頁。

25）前掲11)，345頁。

26）図絵番号2，4，5，6，7，11，12，13，18，19，20，23，27，28，30，31，33，36，37，39，40，43，44，47，48，50，51，54，55，56，57，58，60，61，62，63，67，74，75，78，89，96，98，109，110，112，117，119，120，139，158，185，202，209，210，221，237，244，292，310，311，336，352，360，367，393，394，397，400，447，451，455，457，460，461，465，466，484，485，488，503，504，505，510，511，514，517，519，520，524，527，531，549，551，560，562，563，573，574，575，579，580，582，584，594，603，611，635，654の挿絵が多人数登場図である。

27) 多枚数図の図絵番号は，43，51，54，60，62，67，96，120，158，172，185，186，192，310，311，322，367，393，394，400，421，442，447，455，457，465，466，468，484，485，486，503，524，527，531，551，562，563，579，580，582，584，605，613，615，641，646，649，654である。

28) 俯瞰図の具体的な数は，図絵枚数３枚の挿絵は20図全てが俯瞰図で，４枚のものは12図中11図，５枚は５図中４図，６枚は６図全てである。構成枚数７，８，９枚の挿絵は各１図ずつ存在し，７枚と９枚の図絵は俯瞰図である。図絵枚数10枚の挿絵は３図あり，そのうちの２図が俯瞰図である。

29) ただし，図絵番号１，２，３，34，76，130，188，211，306，437，483，491，498，499，512，513，515，528，546，552，553，592，596，614，616，619，647，652については位置不明である。

30) 前掲16)，113頁。

31) 公式の江戸の範囲である，文政元年（1818）朱引内の「御府内」は，東は亀戸，西は代々木，北は千住・板橋，南は品川までの範囲であり，これと比べても『江戸名所図会』の行楽地域の広がりがうかがえる。

32) 伊藤好一（1981）：江戸周辺農村（豊田武・原田伴彦・矢守一彦編『講座日本の封建都市』第３巻所収．文一総合出版），61～63頁。

33) 前掲16)，113頁。

34) 前田愛（1992［初版1982］）：『都市空間のなかの文学』．筑摩書房，112頁。

35) 玉井哲雄（1989）：江戸・御府内（高橋康夫・吉田伸夫編『日本都市史入門Ⅰ　空間』所収．東京大学出版会）．242頁。

［付記］

本研究は，平成４年度に東京学芸大学に提出した卒業論文を骨子とし，歴史地理学会例会（第162回）において発表した上で加筆補正をしたものである。

本稿作成にあたり，例会発表において御助言・御教示いただいた駒沢大学中島義一先生，専修大学服部昌之先生および江戸東京博物館鈴木章生先生に感謝いたします。

THE REGIONAL CHARACTERISTICS OF EDO RESORT PLACES DURING THE LATE EDO PERIOD:BEHAVIOUR PATTERN OR CULTURE SEEN IN EDO-MEISHO-ZUE

Teruyuki KANEKO

Edo had been the premier city of Japan during the early modern period. By the nineteenth century, the growth of the city had led to the development of leisure-time activities by the townspepole. The merchant classes who were economically powerful, became the core of the new leisure class. In this paper, the author took notice of leisure-time activities in Edo, and tried to analyze the regional characteristics of these places and to make clear the way of life especially behaviour pattern or culture in Edo during the first harf of nineteenth century.

The data used in this paper is Edo-meisho-zue that is a guide book of noted places in Edo published in the early nineteenth century. There are 656 detailed illustrations in this book. The author, in his analysis, used those illustrations to examine the actual pattern of their behaviour culture which was done by the commoners and to draw the geographical distribuoion of Edo resort places.

The results are summarized as follows:

1. The fact that about 60% of illustrations belongs to buddist temples or shinto shrines, points out they were the most popular places for city people. An about 80% illustrations of the religious places which almost consists of temples or shrines are drown in bird's-eye view figures. Bird's-eye view figure is good for understanding the arrangement of individual building. It means that temples or shrines had special significance in Edo-meisho-zue. Besides, temples or shrines, there was a variety of the places such as town, street, village, bridge, shop, mountain, sea, pond and so forth.

2. Edo resorts can be divided into seven resort regions or sectors,which were closely related to the city structure of Ede. The first region of Edo resort was core area including Nihonbashi and Kyobashi, where many merchants lived in. The second to seventh resort areas formed sectors along radiating main roads from Edo. There were many places which were related to the city street landscape in the first resorts region. Over 60% of places were occupied by religious in other regions.

3. There were three concentric zones of behaviour pattern or culture in Edo. The first core zone was included within a radius of five kilometers. The second zone was crowd and emphasized area. It had a ten kilometers radius. The third sphere was whole Edo resort area. This area had a wide distribution and located within a radius of forty kilometers in the west and twenty kilometers in the east.